

「台湾生まれ」の低気圧に注意

いろはつづり

水戸の梅まつりは、17日に開幕する。例年にならない寒波で気をもませたが開花はどうかしら順調のようだ。今年の冬は寒く、関東地方は1月から2度も雪に見舞われた。1月22日午後から降り始めた雪は水戸で19センチ、つくばで

古川 武彦

元気象庁予報課長

15センチと、1月としてはかなりの大雪となり、全市町村に大雪警報が出された。さらに、10日後の2月2日も再び雪になり、銚田では7センチの積雪となった。この雪をもたらしたのは「南岸低気圧」。低気圧は上空の偏西風に流されるように進むが、経路は様々だ。日本列島を縦断するものもあれば、日本海を進むものも。太平洋を東進するケースもある。

南岸低気圧とは、本州の南岸を東に進む低気圧の呼び名。春や秋は曇天や雨を、冬はしばしば雪をもたらす。低気圧の周囲は反時計回りの風が吹いているので北側では北寄りの風が吹く。1月22日午後9時の高層気象台（つくば市）の観測によれば、強い寒波で上空約1500メートル付近は零下4・7度と冷え、毎秒20メートルの北東の風が吹いていた。雲はほとんどが雪の結晶で、上空の北東の風に運ばれて大雪をもたらした。しかも動きが遅く降雪が長引いた。

南岸低気圧の発生源をたどると、1月は中国だったが、2月は東シナ海の

台湾付近だった。後者のタイプの低気圧は、発生の等圧線のふくらみの形が、お坊さんの頭の形に似ていることもあって、以前から予報者の間で「台湾坊主」と呼ばれる。この低気圧は東進するにつれて急激に発達し、1、2日後に関東地方に雨や雪をもたらすことと知られていた。

低気圧は北の寒気と南の暖気の勢力が強いほど発達する。今回の大雪は数年に1度と言われる寒波が主因だ。3月や4月でも関東地方では、南岸低気圧でこれまで何度か雪に見舞われている。台湾坊主が現れたら要注意だ。